

知的障害をもつ学生に対する性教育プログラムの開発と実践 I

Development and Use of Sexuality Education Program for Children with Intellectual Disabilities in a School for Special Needs Education I

(2014年3月31日受理)

平 尾 太 亮

Taisuke Hirao

Key words : スキルトレーニング, 知的障害, 性教育

要 約

小中学校の学習指導要領に性教育が取り入れられた結果、障害児・者の性と性教育の受け止められ方も、少しずつ変化してきた。先行研究から、知的障害をもつ学生に対する性教育のニーズは、学校・家庭ともに高まっている。しかし、性教育の実際の実施率になるとニーズに比べ低くなり、系統的・定期的な性教育の実施率は、さらに低くなっている。それらの要因として、学生の個人差、指導内容の困難さ、時間の無さなどがあげられた。そこで本研究では、従来の抽象的な内容の多い性教育ではなく、具体的な内容で行動の獲得を目指した性教育プログラムの開発をおこない、実際に特別支援学校高等部3年生男子学生を対象に実施した。男女別で性教育を実施した結果、学生の感想から一定の効果が得られた。一方で、性教育の学習効果を客観的に調査する評価方法の不足や、ロールプレイを取り入れた、より効果的で正しい行動の獲得が促進される性教育プログラムへの改善点など、課題も明らかにされた。

1. 問 題 と 目 的

小中学校の学習指導要領に性教育が取り入れられ、全人的なセクシュアリティ教育としての新しい性教育への転換期となったのは1990年台の半ばのことであった。それに伴い、障害児・者の性と性教育の受け止められ方も、少しずつ変化していった(原2010)。その結果を示すように、以前は障害児・者に対する性の問題への意識は「寝た子を起こすな」であり、学校や施設などへの性教育へのニーズは無いとされてきたが、現在は多くの学校や施設で性教育へのニーズの高まりが報告されている(文部省1999)。

中内(2011)の報告によれば、岡山県内の知的障害特別支援学校に勤務する教員にアンケート調査を実施した結果、回答者の100%が知的障害をもつ学生に対して性教育は必要であると考えている。また、山田ら(2010)

の調査でも、全国国立大学法人の附属特別支援学校の教員と養護教諭にアンケート調査を実施したところ、中内(2011)の研究と同様に、回答者の100%が障害をもつ学生に対して性教育は必要であると考えている。この結果からも、学校現場での性教育へのニーズの高まりが確認される。

性教育の必要性が確認される一方で、実施率は100%に至っていない(加瀬1991, 児嶋1998)。特に、性教育を系統的・定期的に行っている学校は全体の30%未満であり、教員や養護教諭の性教育に対するニーズと、実施状況に差がある。これらの理由として、児童生徒の個人差が大きい、指導方法がわからず、どこまで何を教えれば良いのかわからない、教育課程の中に位置づけられていないため時間の確保が難しいなどといった理由が挙げられている(児嶋2005, 三俣ら2003, 西田ら2005)。確かに児童生徒の個人差は大きく、障害の特性から抽象的

な概念の理解が難しく、知識を獲得しても般化の難しさがあげられるため、画一的で概念的な従来の性教育では知識やスキルの獲得と定着は難しい。また、成人後、性犯罪の加害者や被害者になるケースも報告されており、それらの問題を回避するためにも、性に対する正しい知識とスキルを獲得しておく必要があるだろう。

そこで、本研究では、従来の概念的な性教育ではなく、具体的なスキルを獲得する事ができる性教育プログラムの開発と実践を目的とする。

2. 性教育プログラムの開発

1) 手続き

A県特別支援学校高等部の保護者アンケートを参考に、臨床心理士2名と支援学校教員、養護教諭で性教育についての討議・検討し、性教育プログラムを開発した。

2) アンケートの内容

アンケートは特別支援学校教員が在学生の保護者に対して実施し、回収した。アンケートは、「性教育の必要性」、「性教育は誰が実施すべきか?」、「家庭での性教育の実施状況」、「性教育について学校に期待すること、家庭で困っていること」の4つの項目からなる。「家庭での性教育の実施状況」については、実施状況の有無ごとにそれぞれ自由記述欄を設け、実施している内容や、実施していないのであればその理由について回答を求めた。アンケートは無記名式で実施した。

3) 結果・考察

性教育について、子どもに実施する必要があると思う保護者は100%であった (Fig. 1-1)。また、性教育は誰がするかについては、80%の保護者が家庭と学校の両方と回答した。一方、20%の保護者は学校のみと回答している (Fig. 1-2)。

性教育について100%の保護者が必要と回答している一方で、家庭での実施率は20%にとどまっている。残りの80%は「していない」もしくは「必要だと思うができない」との回答であった (Fig. 1-3)。その理由として、親がどう伝えるべきか勉強不足であるから、学校でしてくれるから、子どもが自分で学んでいくから、恥ず

かしいからなどの意見が得られた。保護者は性教育の必要性和、家庭での性教育の重要性を感じているが、実際には実施できていない現状が明らかにされた。

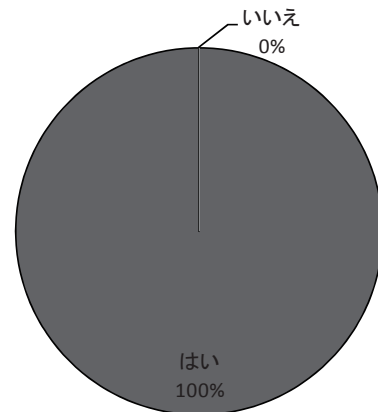


Fig.1-1 子どもへの性教育は必要と思いますか？

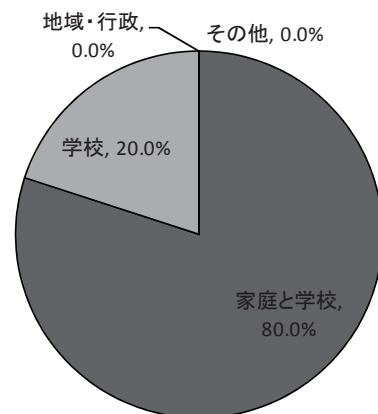


Fig.1-2 性教育は誰がすべきだと思いますか？

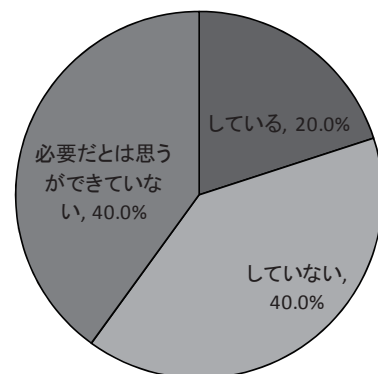


Fig.1-3 家庭で性教育をしていますか？

この結果から、性教育を実施する際の課題の1つであった「どこまで何を教えればよいかわからない」は、

保護者にも同様にあることがわかった。保護者自身、子どもの頃に保護者から性教育を受けた経験がある方ばかりではない。学校や保護者から教わったという感覚ではなく、友人や自身の経験から自然に学んできたのではないだろうか。その結果、自身が保護者として自分の子どもに対して性教育を実施する立場になった場合、困惑し「子どもが自分で学んでいく」と回答することも自然であろう。もちろん学生の中には、性に関する知識を自分で学ぶことができる学生もいる。しかし、間違った知識を獲得したり、自分で獲得できなかったりする学生もいる。そのため、学校・家庭における性教育が重要になり、教員と保護者と連携していく必要があると考える。

3) 性教育プログラムの開発

それらの状況を元に検討した結果、

- ① 性別による教育内容の違いを考慮し、男女別でのプログラムにすること。
- ② 概念的な内容ではなく、具体的なスキルを獲得できるプログラムにすること。
- ③ キーフレーズを設定し、性教育の実施後も使用することで、日常場面での意識付け、般化を目指すこと。

以上3点を踏まえた、性教育プログラムを開発する。①点目は、男女別での性教育プログラムにし、実施者も同性にすることで、同性同士だからこそ話せる環境を作り、性に対する悩みを共有しやすくすることを目的とした。②点目、③点目は問題と目的で示した通り、個々の学生の状態を考慮した結果、具体的な行動を示したほうが性教育の内容がわかりやすいこと、キーフレーズを日常生活で使用し、学生自身で学習内容を振り返る機会が多く得られることで、知識や技術の定着と般化を促すことを目的とした。

男性用性教育プログラムの具体的な内容は、異性に興味をもつ気持ちは自然なことであること、以前学習していたプライベートパーツの重要性と取り扱いの再確認、異性に興味があってもむやみに触れてはいけないこと、どうしても触れたいときには相手に許可を取ること、許可が取れなかった時の対処法（マスターベーション）、デートDVについてなどである。内容が多岐にわたるため、3回に分けて性教育を実施し、その1回目を筆者が担当し

た。

3. 性教育プログラムの実施

A県特別支援学校高等部3年生男子学生5名を対象に平成25年12月に実施した。参加者は筆者と担任団の男性教諭3名で、教室は男性しかいない空間にした。実施時間は40分程度で、内訳はパワーポイント教材（Fig. 2-1, Fig. 2-2）を使用した説明が25分、残り15分を質疑応答の時間とした。各学生の机は教室の端に寄せ、椅子だけを持ち寄った座談会形式で実施した。

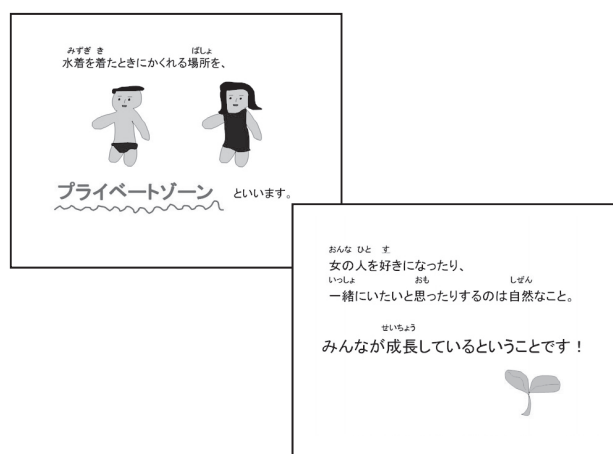


Fig.2-1 パワーポイント教材 例1



Fig.2-2 パワーポイント教材 例2

4. 結果と考察

参加した学生は、事前に性教育について勉強すると聞いていた。また、男女で別れて実施したため、教室の雰

雰囲気や環境が普段と変わり、少し緊張した様子が見られる学生もいた。実際に性教育が開始されると、「性教育=恥ずかしい」というイメージがある様子が、顔を伏せたり、恥ずかし笑いをしたりし、内容に集中できない様子が見られる学生もいた。しかし、開始から5分ほどたち「異性に興味をもつことは自然なことである」の説明をしている頃から笑い声もなくなり、内容に耳を傾けて真剣に聞いている様子が伺えた。結果、約25分間、最後まで集中して性教育を受講することができた。

教室内は、授業を実施した筆者も、参加した教員も同性であり、我々も異性に興味をもつこと、異性にふれる際は許可をとっていること、カッコいい大人の男を目指していること、みんなと一しょであることを伝えたことで、安心してなんでも聞けるといった雰囲気になったようであった。その結果、質疑応答の時間は学生たちが質問をしやすい様子であった。同じ悩みを共有する者同士で、性について考えることが、性教育の効果をより深める一つの要因であろう。

質疑応答になり、1番初めの質問は「女性に興味をもつことは普通のことなんですよ？」であった。パワーポイント教材で示したとおり、異性に興味をもつことは自然なことであり、みんなが成長している証拠であることを再度説明すると、本人は安心した様子であった。

しかし、このような不安感をもつ学生がいるということが、知的障害をもつ学生に対する性教育の不十分さを表している。人間にとって、性に興味をもつことは、自然なことである。我々が当然のように思っていることでも、知的障害をもつ学生はこれまでの経験や学習から、誤った考え方を獲得してしまっている場合がある。そのため、性に興味をもつことは自然なことであると、しっかりと伝えていく必要があるだろう。

性教育での学習効果を般化・持続させていくためキーフレーズを設定した。性教育の授業終了後も教員から学生に、または学生同士の会話の中で、キーフレーズを使用することで性教育の内容を再度思い出し、学習効果が促進されるためである。そのため、授業中や教室内、廊下などで日常的に使いやすいキーフレーズを目指した。結果「カッコいい大人の男になろう」をキーフレーズに設定した。

しかし、「カッコいいとは何か？」との質問があった。

質問した学生に「あなたの思うカッコいいとは？」と聞いかけると、「タトゥーをいれたりサングラスをいれたりすること」との回答であった。同じ質問を他の参加学生にすると「優しさや素直さ」との回答が聞かれた。キーフレーズから想起して欲しい内容は、後者の内面についてのかっこよさであったが、婉曲的な説明の仕方では伝わりにくい学生もいたようであった。かっこよさについて、初めに具体的な行動で明確に定義付けをしていくことが必要であろう。キーフレーズを使用し、性教育の学習内容が想起できるようにすることが、学習した内容の定着や般化・維持につながる配慮が必要である。

性教育を実施する際に問題になっていた、学生の個人差については、今回の性教育を実施している時にも確認できた。知的面の発達差による同じ説明でも捉え方が違うことや、情緒面の発達差による異性への興味・関心の度合いの違い、初期場面への緊張感や不安感の強さの有無など、学生の個人差は様々である。今回も性教育に参加した5人のうち3人は、授業内容の理解はスムーズであった。しかし、1名は自閉性の強い学生であり、異性への関心が弱く「異性に興味をもつ気持ちは自然なことである」という感情が理解できないとのことであった。また、もう1名は緊張感が強く、普段と違う環境での活動に不安感をもっている様子であった。同性のみの環境を作ることで、性教育の効果が得られやすいように配慮したが、本児にとっては普段と違う環境になり、より緊張感と不安感を高める結果となった。また、実施者が本児と接点がありません筆者であったことも、緊張感や不安感に影響しているだろう。そのため本児のような初期場面が苦手な学生には、環境への配慮はもちろんのこと、活動実施者との関係性が重要になってこよう。

5. 今後の課題

本研究では、現在様々な問題が挙げられている知的障害をもつ学生に対する性教育について、それらの課題点を補った新しい性教育プログラムの開発と実施をおこなった。しかし、新しい性教育プログラムの開発と実践を通して2点の課題が見つかった。1点目は性教育の効果の測定・評価方法である。現在は、実施者や教師が、学生自身の表情や感想から判断した主観的な測定・評価

が中心である。何をもって性教育の効果があったと考え、どのようにそれを測定し評価していくのか。それらを客観的に評価できる測定・評価基準の開発が急務であろう。そして、性教育後のフォローアップ調査を行うことで、定着率についても調査していく必要がある。2点目は今回の性教育プログラムは具体的なスキルを伝えることを念頭に置いて作成したが、伝えるだけにとどまっている。具体的なスキルを獲得するためには、ロールプレイなどの体験をすることで獲得しやすくなるため、今後はソーシャルスキルトレーニングの要素を取り入れた性教育プログラムに発展させていく必要があるだろう。

以上2点を次回の課題とし、より学生にあった性教育を実施していくことが重要となる。河田ら(2012)にもあるように、学校卒業後に性被害者にも性加害者にもならないために、学校で性に関する正しい知識と行動を伝えていく必要があるだろう。そして、保護者との連携を密に取りながら、学校と家庭で性教育に取り組んでいく必要がある。

5. 引用・参考文献

- 原恵美子 2010 知的障害児に対する特別支援学校における性教育の状態と、教諭と保護者の意識 治癒教育学研究, 30, 61-69.
- 加瀬進 1991 我が国の障害児教育諸学校における性教育の現状, 性研究会議会報, 3 (2), 30-37.
- 河田史宝・佐藤春香 2012 知的障がいのある児童生徒に対する性教育 : 教職員と保護者に対する調査から 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 4, 15-29.
- 木全和巳 2010 児童福祉施設で生活する〈しょうがい〉のある子どもたちと〈性〉教育支援実践の課題 福村出版.
- 児嶋芳郎 1998 全国調査にみる性教育の現状と課題, 障害者問題研究, 25 (4), 314-321.
- 児嶋芳郎 2005 知的障害養護学校における性教育実践の教育課程への位置づけと課題, 障害者問題研究, 33 (3), 231-239.
- 児嶋芳郎・細渕富夫 2011 知的障害特別支援学校における性教育実践の現状と課題 ー全国実態調査の結果よりー 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 10, 105-110.
- 三保共永・加瀬進 2003 知的障害児への性教育授業実践の推進に関する予備的検討, 東京学芸大学紀要, 54, 183-193.
- 文部科学省 2009 特別支援学校 教育要領・学習指導要領
- 文部省 1999 学校における性教育の考え方, 進め方
- 中内みさ 茨愛実 2011 知的障害児に対する性教育の課題 ー岡山県の特別支援学校における現状からー ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所年報, 24, 30-38.
- 西田充潔・田実潔 2005 知的障害児に対する性教育について ー養護学校における指導の現状と教員育成カリキュラムの必要性の検討ー 北星学園大学社会福祉学部北星論集, 42, 75-86.
- デートDV防止プロジェクト・おかやま/岡山県 2013 デートDV愛されているから…? .
- 綿引伴子・村瀬真理子・北潟理美 2011 特別支援学校における“恋愛学習”ー授業案の検討と実践ー 金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 3, 75-85.
- 山田晃生・水内豊和 2010 特別支援学校における性教育に対する意識と実態 ー国立大学法人の附属特別支援学校の教諭ならびに養護教諭を対象とした質問紙調査からー 富山大学人間発達科学部紀要, 5 巻 1 号, 49-64.

